イスパニカ 9 (1964) p. 30

第9回大会(1963)続

Fernando Acaso (Kioto Gaidai)

Partiendo de la noción de "fonema" y de una comparación entre los fonemas del español y del japonés, se establece un intento de método para hacer practicar a los estudiantes estos tres sonidos que en japonés forman parte de un sólo fonema. El método se basa en el principio de que para aprender a pronunciar con corrección unos fonemas nuevos, es necesario empezar por aprender a distinguirlos de oído. El trabajo va acompañado de gráficos y de listas de contrastes mínimos.

ティルソ・デ・モリーナにおけるドン・フワン

東京外国語大学　会　田　　由

世界文学で最初にドン・フワンを文学にとりあげ，性格を与えたのは，言うまでもなくティルソ・デ・モリーナの「セビーリヤの色事師と石の招客」である。しかし，ティルソ・デ・モリーナが描いたドン・フワン像は必ずしもわが国では正当に理解されていないうらみがある。単にティルソ・デ・モリーナがメルセー修道会の僧だったというところから，モリエールの無神論者ドン・フワンと異り，宗教的だというが如きは，実際に「色事師」を読んでいれば，所詮みちびきえない論と言えよう。私は作品そのものによって，ティルソの描いたドン・フワン像を述べたいと思う。もし又時間がゆるせば，ティルソの作品において，この作品がどういう位置をしめすかも検討したい。

後　記

この九号にも原稿がほとんどなかった。送られてき原稿を全部掲載してやっとこの号ができ上った次第。従って委員会を開く必要もなかった。次号にはより多くの会員から立派な原稿が寄せられることを期待したい。なお校正を手伝っていただいた天理大学イスパニヤ学科研究室の三原，木原，志賀の三氏に厚くお礼を申し上げる。

（編集委員会　大島　記）

イスパニカ 10 (1965)

学会記録

日本イスパニヤ語学会の活動(5)

第十回大会（上智大学　東京　昭和39年11月6日）　1964

アルマンド・パラシオ・バルデスにおける異常について

早稲田大学　富　永　　浩

A・パラシオ・バルデス (1853～1938) のすぐれた客観主義，知的精神は今更贅言を要しない文学的事実であり，わたしもそれを認めるについて人後に落ちるものではないが，そのようなおだやかな，明るい，もっとも理性的なバルデスと正反対のもの，彼らしくない非理性的な異常，本能的暗黒世界がバルデスの内側にはある。これを証する具体例を時間の許す範囲であげ，おわりにその明澄な主知主義との関係づけを試みたい。

中南米スペイン語に特徴的な諸音声現象を音素論的に見た時に生ずる技術的問題点

東京外国語大学　原　　誠

スペイン語音素論においてアクセントとピッチを取上げるまえにちょっと道草をして方言学に眼を転じることにした。カスティリャ方言以外の諸方言に音素論を適用することはスペイン語が将来どのような構造をもつに至るだろうかということをある程度知ることができるという意味において大いに意義がある。

ハシント・ベルダゲールのラ・アトランティダについて

京都外国語大学　アンヘル・マリーヤ・フェレー

内容は本号に全文掲載（pp. 37～46）

ブスコンについて

東京外国語大学　会　田　　由

イスパニカ 8 (1963) p.36

(11) David Thomson: World History from 1914 to 1950 (現代の世界　中野好夫, 中村英勝訳　紀伊国屋書店)
(12) 増田四郎　歴史と現実 (思想　1963年6月号所載)
(13) 上原専録　世界史像の問題 (井上幸治・林健太郎編　西洋史研究入門　東京大学出版会　所載)
(14) José Ortega y Gasset: La Rebelión de las Masas 1930. (佐野利勝訳　筑摩書房)

学会記録

日本イスパニヤ語学会の活動 (3)

第八回大会 (東京外国語大学　東京　昭和37年11月3日)　(1962)

初期イスパニア文学のゲルマン要素

京都外国語大学　近松洋男

五，六世紀に盛に歌われたゲルマン英雄詩は北西ヨーロッパ各国に保存され十一世紀に各国語でかきあらわされた。イスパニアでは西ゴート族はローマ化を急ぐあまり自己の英雄詩を軽蔑し終に禁止さえしたが，カスティリャの自由な雰囲気のもとに復活し El mio Cid に結実する。次に半母音 /j/ と /w/ についても西ゴート語の法則がイスパニア語のそれに対応する。「r, l, m, n 及び b, d, g, s の前又は後で /j/, /w/ が現れる」——起半母音現象。

「ドン・キホーテ (正篇)」に於ける vuestra merced のシンタックスの面から見た特徴

京都外国語大学　秦　隆昌

人称代名詞の直接，間接補語の形は次の三種に大別する事が出来る。

(1) A型 (弱形) ——me, te, le, etc.
(2) B型 (強形) ——a mí, a ti, a él etc.
(3) C型 (複合形) ——me ... a mí, te ... a ti, le ... a él, etc. または a mí ... me, a ti ... te, a él ... le, etc.

この中B型は一般の文法書では正しくない形として取扱われている場合が多いが，この形は実際に使用されており，その使用頻度は時代を逆上るに従って多くなっている。一方「ドン・キホーテ (第一部)」では vuestra merced に於て特にB型の使用頻度が多い。これ等の問題を統計的に調査し，用法の変化を歴史的に考察した。

イスパニカ 9 (1964) p.29

学会記録

日本イスパニヤ語学会の活動 (4)

第九回大会 (神戸市外国語大学　神戸　昭和38年11月15日)　1963

バルメスにおける現代的意義

小樽商科大学　一色忠良

護教論者，哲人乃至は操觚者として半世紀前にメネンデス・イ・ペラーヨはバルメスを現代に掘り起しているが，知性と信仰の一致，資本主義と社会主義の問題，その他の新しい社会問題が次々に生起しておる現在，十八世紀前半の激しい時代に生きた，ネオスコラ哲学の先駆者とも云えるバルメスを，現代の場で考えてみたい。

俗語ラテン語の起半母音現象の必要十分条件

京都外国語大学　近松洋男

俗語ラテン語の母音 o, e の重母音化及び子音の yod 化は /j/ 音をひきおこすことに於て共通な現象であり，主として流音・鼻音により促進される。(起半母音現象) 必要条件

この現象が起半母音要素 l のみで支配されているときの十分条件は $\frac{dy}{dx}=\frac{dy}{dl}\cdot\frac{dl}{dx}$ であり，いくらかの非起半母音要素 p もあずかっているときは $\frac{dy}{dx}=\frac{\partial y}{\partial l}\cdot\frac{dl}{dx}+\frac{\partial y}{\partial p}\cdot\frac{dp}{dx}$ である。

古代イスパニヤ語に於ける人称代名詞の補語の重複について

京都外国語大学　秦　隆昌

人称代名詞の補語を重複させる傾向はセルバンテスの時代には既に一般化し，強調表現の場合には殆どこの重複補語が使用されている。しかし古代イスパニヤ語に於てはこの重複補語よりも強補語 (即ち，前置詞 a＋人称代名詞の対前置詞格の形) が強調表現の場合にはより多く使用されている。この間の表現形式の選択の推移を歴史的に考察して見た。

Método para enseñar la prounciación de la /l/, /r/ y /rr/ del español a japoneses.

イスパニカ 6
(1961) p.55

学会記録

日本イスパニヤ語学会の活動(1)

第一回大会（東京外国語大学，昭和30年12月4日） 1955

町田俊昭　現代スペイン語の与格の機能について
大島　正　ベルナル・ディアスとメキシコ征服
会田　由　ロマンセについて

第二回大会（上智大学，昭和31年11月11日） 1956

会田　由　スペイン古典劇における体面感情について
大島　正　ウナムーノの三模範小説
大林多吉　中南米文学展望
町田俊昭　Aspecto——本質と応用理論としての形態——

第三回大会（大阪外国語大学，昭和32年10月12日） 1957

原　誠　再帰動詞の諸用法の検討
神代　修　スペイン内乱の特質について
町田俊昭　Rodericus Didas Castellanus の事蹟
宮城　昇　語順に関する若干の研究
高見英一　「ウワシプンゴ」とその社会的背景
瓜谷良平　冠詞の研究
吉田秀太郎　イスパニヤ語における俗語ラテン語の特徴

第四回大会（早稲田大学，昭和33年10月12日） 1958

近松洋男　イスパニヤ語に於けるゲルマン語の影響
宮前要平　カタルーニヤ語の発音について
大島　正　ガルシア・ロルカの詩における隠喩について
高見英一　「ウワシプンゴ」における語法の研究
鼓　直　La Vorágine について

第五回大会（天理大学，昭和34年10月10日） 1959

近松洋男　ラテン語動詞からイスパニヤ語動詞への移行経過
大島　正　瀑東綺譚におけるイバニエスの投影
島岡　茂　イスパニヤ語の動詞構造
高見英一　リカルド・グイラルデスの作品における語法の研究
辻井正衛　近代日本におけるイスパニヤ文学の位相

イスパニカ 6
(1961) p.56

第六回大会（拓殖大学，昭和35年11月12日） 1960

近松洋男　イスパニヤ音素と西ゴート音素との関係
大島　正　ガルシア・ロルカの詩における日本
会田　由　フロベールにおけるドン・キホーテの影響

日本イスパニヤ語学会会則

第一条　本会は日本イスパニヤ語学会と称し，事務所を東京外国語大学イスパニヤ研究室に置く。

第二条　本会はイスパニヤ語諸国の言語及び文学を主とする諸般の研究を目的とする。

第三条　本会は次の事業を行う。
1　年1回大会を開き，また随時研究会を開催する。　2　会報其他の刊行物を発行する。　3　海外諸団体との連絡を計る。　4　その他必要な事業を行う

第四条　会員は会則第二条に掲げる研究を行う者並びに本会の趣旨に賛成する者とする。入会は会員二名以上の推薦により理事会の承認を要する。

第五条　本会の経費は，会費，寄附金及び其の他の収入をもってこれにあてる。

第六条　会員を正会員，学生会員，維持会員，賛助会員とし，正会員は年額千円，学生会員は年額五百円，維持会員は正会員のうち特に年額二千円以上を会費として納入するものとし，賛助会員は本会の趣旨に賛同して寄附を行った者とする。他に名誉会員および顧問を置く事ができる。

第七条　本会に次の役員を置く。

会　長	1　名	理　事	15　名
副会長	1　名	監　事	2　名
理事長	1　名	委　員	若干名

会長，副会長，理事は正会員の互選による。
理事長は理事の互選による。
委員は理事会の指名による。
会長は会務を総括し，会を代表する。
副会長は会長を補佐し，会長事故あるときは会長の事務を代行する。
理事長は会務を施行する。理事会の招集は理事長が行う。
監事は会計を監査する。
委員は本会の事務処理に当る。事務の主なるものは左の通りである。
1　会計事務　2　機関誌の発行　3　庶　務

第八条　役員の任期は二年とし重任をさまたげない。

第九条　本会則の変更は大会の決議による。